

第9回 全日本ジュニアボート選手権大会(兼)2009年U19日本代表選手選考会報告書

静岡から熊本(菊池市)までの長い道のりではあったが、やっとの思いで競技会場(斑蛇口湖ボート場)に到着。生徒は長旅の疲れも見せず、会場に隣接するリギング会場にトラックで運搬された艇(ボート)と熊本県ボート協会から借用した艇を降ろし、早速、艇に金具を取付ける作業(リギング)を開始した。

この大会は日本代表選手選考会も兼ねているため、いつもより慎重な金具の取り付けと高さ調節が行われた。艇への取り付けが終わるとすぐに30段もあろうかという急な石段を降り、その下にある栈橋に艇を運んだ。そして、ゆっくりと湖面へ艇を浮かべた。いよいよ練習の開始である。

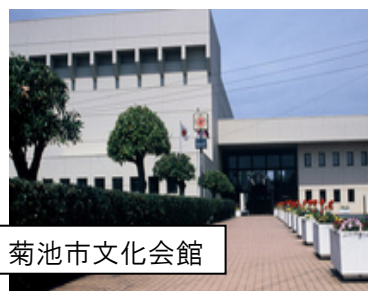
今回の競技会場の斑蛇口湖ボート場(はんじゃくこ)は、菊池市内の宿泊所から30分ほどの距離で、傾斜の険しい山道をだらだらと登っていった竜門ダムの上流に位置している。

この竜門ダムは熊本県北部を流れる菊池川の支川、迫間川上流にあり、熊本県北部で唯一の水ガメとしての役割の他、洪水を防ぐために平成14年に完成し多目的ダムだそうだ。ダムの堤頂長は620m、高さ100mにも及び25階建てビルに匹敵する。

私が経験した、今までの競技種目は、会場までのアクセスはさほど苦にならなかった。しかし、ボート競技となると会場までの移動手段や時間など簡単には解決できない。また、佐鳴湖や天竜漕艇場とは違い、単純計算で経路を想定していた自分の考え方が甘かったことに反省する。聞くとところによると、全国でも同じような会場は数多く存在するという。

湖面での艇の調子や漕ぎを確かめたのか2時間ほどで選手が栈橋に戻ってきた。艇をリギング場所に移動し、最終調整。オールを受ける取付金具の高さをリング状のプラスチック(厚さ2mm)で微調整する。こういった細かな作業が何回か繰り返される。本当に根気がいる競技である。このような準備万端からみても明日の練習にも気合が入るだろう？！

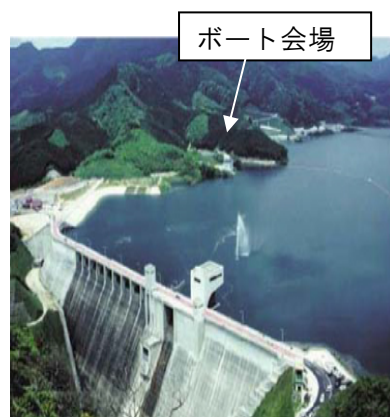
以前にも思ったが、ボート競技は他の競技と違い自分の艇に自分で金具を装着し、競技が終われば取り外さなければならないという厄介な競技でもあり、オールと水面のわずかな高さの違いによって漕ぐタイミングも違いがあるらしく、今回の練習後にも高さ調節は欠かさなかった。決して、選手が神経質なわけではない！！



菊池市文化会館

午前中の練習を終え、15:00からの開会式を待つ。会場は宿泊場所から徒歩15分の菊池市文化会館で行われた。会場では地元菊池高校の生徒さんによる伝統芸能のアトラクション「吟詠剣詩舞『菊池』」で歓迎された。その後の開会式では、主催者(日本ボート協会)あいさつや菊池高校漕艇部代表の力強い選手宣誓に始まり、続く代表者会議では組み合わせ・IDカードの発行・U19日本代表選手の選考方法・競技規則・選手の安全確保等の内容の説明が行われ、開会式は2時間ほどで終了した。参加選手男女各78名と監督・代表者の計200名ほどの規模であった。

大会の参加資格としては、前年度のインターハイ・国体・選抜大会等で入賞した実績のある選手、平成20年度全国通信制エルゴ大会(20分)、マシンローイング大会(2,000m)で男子5,400m/20分・7分00秒/2,000m、女子4,700m/20分・8分00秒/2,000m及び全国高体連ボート協会専門部が推薦する選手と出場条件が非常に厳しくなっている。本校からは男子の山田一輝選手(3年)と女子の森下亜美選手(3年)の2名がこの大会に推薦され出場した。



ボート会場



漕艇専用のエルゴトレーニングマシン

漕艇専用の棧橋(奥が出艇用, 手前が着艇用)



熊本の会場に来てから3日目。今日から、いよいよ競技が開催される。朝5時30分起床、6時朝食、7時出発とハードスケジュールであった。競技開始は女子シングルスカルからの総計13レース。1レース6人のクルーが準決勝進出の1枠を狙う。

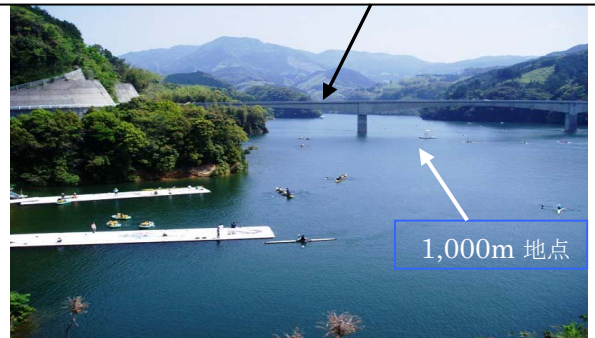
本校の森下亜美選手は第1レースの9:00からの出艇である。前日までの2時間程度ではあるが、練習で艇の確認調整も十分であった。

ここで漕艇競技のレースを簡単に説明することにする。

- (1) 発艇は、各レーン毎に設けられたステイク・ボードに船尾をつけ、艇首を発艇線に並べる。ここでは、ウォーターマンと呼ばれる補助員(生徒)が補助ボートから体を伸ばして船尾を持つ。
- (2) 発艇員の予告に続いて、号令と同時に赤旗(信号機のようなランプ有)が振りおろされてスタートする。号令は「アテンション」・「ゴー」と発声される。2度フライングすると、除外となる。
- (3) レース中は、不可抗力あるいは審判艇の主審が特に認めた場合を除き、「真面目な態度および正常な競漕速度」をもって全距離を漕ぎ終えなければならない。発艇の号令にかかわらず発艇しなかったり、主審の宣告を待たずに競漕を中止したり、フィニッシュラインを通過しなかったりしたクルーは競漕権の放棄とみなされ失格となる。(上半身裸で漕ぐことはマナー違反とされる)
- (4) レースの途中でコース侵害や妨害等があると、主審の判断により除外となることがある。
- (5) 勝敗は、艇の先端のポールがフィニッシュラインを通過した順序で決める。
- (6) 競漕会においては、競漕委員会の許可なくコースに沿ってクルーに伴走することや、競漕中、無線装置や拡声器を用いて岸からクルーに助言や指示をすることは禁止されている。

艇庫からレース会場を望む。橋の奥がスタート地点

陸上でのウォーミングアップも終わり、いよいよ艇を棧橋に運び水面に浮かべる。レース開始40分前である。これから水上での最終調整のアップが始まる。出艇を見送り、すぐに艇庫へと移動した。漕艇部の顧問(副)となって購入した双眼鏡で練習の様子を観察する。湖面にかかる陸橋がちょうどスタートから1,000m地点である。ちなみにこの大会のレースは2,000mである。(日本選手権・国際大会と同じ距離)



スタート地点から選手コールのアナウンスが静かな山間にこだまします。いよいよスタートである。“アテンション・ゴー”の合図とともに各艇がスタートした模様である。双眼鏡で確認するが、まだ艇は見えない。やっと見えてきた艇が橋の下に差し掛かるころアナウンスが入り、先頭の艇の紹介がされた。トップは本校の森下選手ではない。もう一度双眼鏡で確認する。3レーンに黒いユニフォームにオレンジ色で「浜松北」の文字が確認できた。少し遅れているようである。トップは大分県日田高校の赤尾選手。後で分かったことだが、この選手は春の全国選抜大会(天竜漕艇場)で優勝(女子クオドルプル)しているという。

3レーンの本校の森下選手が艇庫の前まで近づいてきた。第4位の通過、私がいる艇庫前で1,750mの距離、残り250m最後の頑張りに期待する。艇庫の地点では確認できなかったが次々にゴールブザーが鳴る。レースが終わり、着艇の棧橋に森下選手の艇が近づいてきたが、疲れている様子は感じられなかった。艇を持ち上げ指定場所に運び結果を待つことにした。しばらくして、第1レースの着順発表のアナウンスが入り、『第4位、第3レーン、浜松北、森下さん』であった。レースの結果、午後の敗者復活戦に回ることとなった。

競技会場から艇庫入り口の控え室に戻ると、男子シングルスカルに出場の山田一輝選手がウォーミングアップを開始していた。発艇レースの時間は 11:16 である。艇庫の周りはアップダウンの激しい 2 車線の県道になっていて、そこで 30 分ほどの陸トレの後に艇の置いてある場所へと移動した。

レースのレーンナンバーカード(プラスチック製)を艇に取り付け、出艇用の栈橋へと担いで移動した。そして、ゆっくりと艇を水面へ降ろした。気持ちの上でも準決勝進出の条件である 1 位通過を期待した。すぐに艇庫に戻り、双眼鏡で練習の様子を観察する。

9 時から始まっているそれぞれのレースと平行して練習に入るの、対岸やスタート地点への移動は注意しないと大変なことになる。



ボート保管場所(艇庫)

ここで、引率として選手とともに行動するにあたって、困ったことが幾つかあった 1 つをあげることにする。それは、艇を保管する鉄パイプのアンクル(ラック)は 1 基で両サイドに 4 艇ずつ計 8 艇が保管できる。今回の山田選手の艇の保管場所はその最上段であった。

そのため、両手を目一杯伸ばしても艇をラックから外すことが困難で何度か他校の先生にお願いした次第であった。

いよいよ山田選手の出場する男子シングルスカル・レースナンバー18・E組のレースがスタートした。先ほどのレースと同じように艇庫での観察。双眼鏡では艇の一つもまだ確認できない。1,000m 付近の橋のたもとに何やら動きが見える。するとアナウンスが始まった。トップは全国でも強豪校の宇和島水産高校(愛媛)の横山選手であった。山田選手の姿がまだ確認できない。しかし、すぐに「浜松北」のオレンジの文字が 6 レーンにうつすらと見えてきた。他の選手と同じように必死になって漕ぐ姿が感じられた。艇庫の前の通過は 4 番目? 残りの頑張りに期待したい。

しばらくしてトップがゴールしたのか、ゴールブザーが次々と聞こえた。残念ながら予選通過はならなかった。森下選手と同様に午後の敗者復活戦である。すぐに着艇栈橋に走った。栈橋では全力を出し切ったのか、軽くなだれた姿で近づいてくる山田選手の艇が近づいてきた。『お疲れさん!』の声を掛け艇を持ち上げる。それ以上は無言であった。

保管場所に着くと漕ぎのタイミングが合わなかったのか、金具のプラスチックリングの位置を取り替えるための高さ調節のリギング作業に入った。作業はすぐに終わったが、午後の敗者復活戦への意気込みは感じられた。

午後の敗者復活戦の組合せが発表された。女子シングルスカルの森下選手の出場レースは 14:16 発の H 組、男子シングルスカルの山田選手は 15:32 発の I 組である。その間、簡単な昼食と休憩時間に費やした。



勝負が左右されるため慎重なりギング作業(調整)

リギング会場の下の石段に腰を掛けていると陸トレを終えた森下選手が笑顔でこちらの方へやって来た。意気込みは充分である。早速、艇を出艇用の栈橋に運ぶ。このレースによって準決勝への進出が決まるか、順位決定戦に回るかの大きな勝負となる。ましてや 1 着のみが準決勝に進む権利を得る。そのため、艇を送り出すときの声掛けにも自然と気合いが入る。こちらの声掛けと同時に爽やかな返事が森下選手から返ってきた。健闘を期待する。

栈橋から石段を駆け上がり、艇庫へと向かった。いつものように双眼鏡で準備の様子を確認する。漕艇に関しては専門分野でないため、他の選手の漕ぎや練習風景を確認しながら参考にする程度である。だが、全国の強豪がここ斑蛇口湖ボート場で熱戦を繰り広げていること、また、この大会の上位者が全日本ジュニアの代表権を得ることにより、フランスで開催される世界大会にも出場できる大会とあって、全国レベルの高校生の漕ぎが確認できることは参加している(引率者)だけでも非常に勉強になっていることは確かである。

女子シングルスカルH組の森下選手の出場するレースが始まった。午前中の様子から心得たもので、アナウンスが流れた後に橋の下付近の様子を双眼鏡でレースの様子を窺う。アナウンスは『トップは浜松北高 森下さん』であった。双眼鏡でも4レーンに『浜松北』の黒いユニフォームにオレンジの文字がくっきりと判断できる。力強くこちらへと向かって来ていた。双眼鏡越しに「頑張れ、頑張れ」と心で叫んだ。艇庫前では2番目の選手と半艇身の差しかない。気持ちはドキドキしていたが、自然と今度は『森下！行け～！』、『最後まで、力を抜くな！！』と大きな声を発してしまった。内心、恥ずかしさもあったが、周りの監督や保護者も同じように声援を送っているので気にはならない雰囲気を見せてくれた。ついにゴールのブザーが鳴り始めた。最初のブザーと次のブザー音はほとんど差がない。最後はどうだったのだろうか……？

ブイとブイの間隔は10m。
この距離を5～6回のレート(漕ぎ)で進む



艇庫前でも艇のゴールの様子は分かるが、レーン(ブイで区切られている)や選手の艇の位置が斜めに見えるため、確かな着順は判定できない。ゴールのブザーがどの艇に発信されたのか、きわどいレースでは分かりにくい。そのため、選手のオールを漕ぐ腕がゆっくりなったり、漕ぐのを止めたりした動作からゴールしたのかを判断するしかない。心の中で『トップでゴールだ！』と祈った。

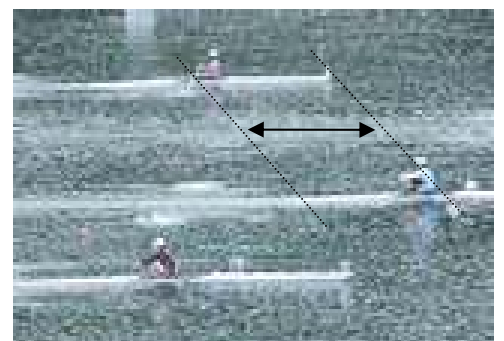
すぐに着艇棧橋まで足を走らせた。棧橋で森下選手の履き物を持って着艇を待つ。先に到着した他の選手の艇が揚げられるのを見届けて棧橋に着艇場所に艇を近づける。選手との確認の意味で、大きく手を振った。近づいてくる森下選手の顔から満面の笑みが浮かぶ。きっとトップでゴールできたのだろう。艇を棧橋に固定し、すかさず『やったね！』・『お疲れ！』と労いの言葉を掛けた。森下選手からは『今までの中で一番いい漕ぎができた！』の言葉が返ってきた。この言葉でトップ通過を確信した。

すぐに艇を保管場所まで運び、レース結果の放送を待った。艇を固定して雑巾で艇の水滴を拭き取りながらレース結果のアナウンスが流れた。結果、『只今のレース、1着、4レーン、浜松北、森下さん』であった。これで明日の準決勝進出が決定したと同時にフランス大会のチャンスが一步近づいた。

続く、男子シングルスカル山田選手がウォーミングアップに入った。その前の森下選手のレースは艇庫前で声援を送っていたので結果は知っている。そのためか、山田選手も気合いが入っているように感じ取れる。水上でのアップの時間が近づき、発艇棧橋で山田選手に健闘の声を掛け送り出した。そして、すぐに艇庫へと向かう。湖面に面した艇庫の観戦席には多くの人が集まっている。レースを終えたばかりの森下選手と一緒に山田選手のレースを待つ時間がとても長く感じた。15:30、いよいよレースが開始される。上流の方から選手コールの放送が聞こえ、『アテンション・ゴー』の号令とともにスタートした。橋の下(1,000m)付近の放送では3番手が山田選手のアナウンスであった。残り1,000mの後半に期待したい。艇庫前を通過。懸命の漕ぎが艇をグングン前に押し出している。ここからは双眼鏡なしで選手の顔が分かる。必死に歯をくいしばりながら漕ぐオールのレート(回数)も速くなっている。

『頑張れ～！、最後まで諦めるな！レートを上げろ！』と声掛ける。トップの艇とは2艇身差ではあるが、まだ分からない。1分後、ゴール前ではトップの選手のゴールブザーな鳴り響いた。3つ目のブザーが山田選手のゴールのようであった。残念ながら準決勝へは進めなかったが、明日の順位戦で最後の力を出し切って欲しいものである。

夕食後のミーティングでは、今日のレース展開、各地点(500m, 1,000m, 1,500m)のレート回数や漕ぎの反省を踏まえ、明日のレースに向けての意気込みを確認した。



<艇と艇の差を比較の場合>
中央の艇が半艇身のリードをしている。

宿泊会場



ここ熊本では、毎日、宿泊場所から会場までの往復である。1日の日程はというと、朝4時30分の起床である。以前にも報告したとおり、ボート競技は健康によい日程で時間が進む。起床後、1時間程度の宿泊所付近の散策(散歩)。これは、朝食が美味しく食べられる手段の一つでもある。

普段の生活では、ほとんど朝食を口にしないため、5月の連休合宿(3泊4日)や中日本レガッタでは体重増加という出来事があって困っていた。これは、決して運動不足ではなく大量のカロリーを摂取するからである。

ボート競技選手は食事の量も半端でないので食べるのも実に頼もしい。特に選手と食事を共にすると食欲も必要以上に増す。これは個人として良いことか悪いかとかの判断に迷う次第である。

(第20回サラリーマン川柳作品第16位: 妻タンゴ 息子はスノボ 俺メタボ [雅号:ダメ親父]より)

朝食は6時であるが、出発が7時と早く、部屋でのんびりとする暇はない。そして競技会場への到着は7時30分。会場は競技関係者以外は居ない。会場で10時間の競技日程を過ごした後は、最後に顧問が会議が行われ、明日のスケジュール表が渡される。そのため、17時~17時30分の帰着になる。

この宿泊所には温泉(単純泉ラドン温泉[弱アルカリ性]、かけ流し)が待っていて、幸いなことに1日の疲れを癒してくれる。夕食は19時、その後19時30分にはミーティング。息つく暇もなく21時には不思議に床に入っ



てしまっている。これが熊本での1日である。

翌朝、今日は土曜日、いつものような日課が始まった。

本日は女子の準決勝と男子の順位決定戦である。9:00から森下選手が出場するレースが始まる。会場に着くと、すぐにいつもの通りの陸トレ、水上トレーニングに入った。このレースでトップでゴールすればフランス大会が確実に見えてくる。

予定時間となり競技が開催さ、第1レース2レーンでの出場。このレースでは予選レースでも対戦し、トップでゴールした赤尾選手(大分:日田高)と同組である。予選では5艇身と差を広げられたが勝負の世界は分からない。発艇から4分後、橋の下を通過したようで、いつものアナウンスが入った。双眼鏡を覗く。

やはり4レーンの赤尾選手が力強い漕ぎでトップをキープしている。2レーンの森下選手は3番手争いの模様であった。艇庫前の付近ではトップの赤尾選手以外の4つの艇が1艇身~2艇身差の熾烈な争いであった。勿論、本校の森下選手もそれに加わり健闘している。すかさず、『そのまま、行けー!』・『力を抜くな~!』と声援を送る。準決勝とあって他県の応援隊も必死で声をからす。次々とゴールのブザーが鳴り響いていた。結果はどうなったのだろうか?……。

栈橋から大きく手を振った。森下選手がそれを確認し、すぐに着艇の準備に入った。少しずつ艇が近づいて来た。『お疲れ!頑張ったね!』と言葉を掛けると『1レーンの選手がオールの漕ぎに失敗していたので、焦らずに絶対負けないように漕いだ』と冷静な言葉が返ってきた。トップでゴールできなかったが今日の漕ぎにも満足しているようであった。後は明日のレースの組合せである。



艇庫前の掲示版

各レースのトップでゴールした選手はA組の決勝であるが、それ以外の選手は着順によりB~E決勝のレースが決定する。レース記録(タイム)の如何により、組合せの変動はある。艇庫での掲示版への発表が気になるころだ。

男子シングル 11:48 のレースに出場する山田選手が動き始めた。女子シングルが準決勝、続く男子シングル準決勝が終了してから、だいぶ時間が過ぎた。順位決定戦は 48～53 位を決定する J 組のレースである。残念ながら山田選手としては、この大会の最後のレースとなる。そのため、ウォーミングアップからレース展開のシミュレーションや課題を決めてレースに臨むことにしていた。昨日のミーティングでの話でもあった。

レース開始。橋の下から次々と艇が見え、その後を審判艇が追い駆けている。500m のポイントごとに白旗が揚がっていた。先にもルール説明で述べたが、「真面目な態度および正常な競漕速度をもって全距離を漕ぎ終えなければならない。」の解釈より、ポイントごとに確認のための合図である。山田選手の目標としていたレース展開(「ポイントごとのレート(漕ぐ回数)」)は守られているようだ。双眼鏡でも分かるようにいつもの漕ぎを安定させている。残り 250m の艇庫前を通過するが 2～3 番手争いの真っ只中。しかもトップとは 2 艇身と僅かな差だ。『頑張れ!』もう一息、応援にも力が入る。ゴールブザーが鳴った。結果は、どうだっただろうか? レース結果は後にして栈橋へと走った。昨日はレース終了後、規定のレーンを横切らず、「高校生ルール」を守るようにと注意の放送をされた。栈橋で心配して眺めていると指定された位置の赤色のブイを確認し、こちらに向かっている今回は大丈夫であった。

この橋の下を通過しないと、艇庫からは見えない



しばらくして栈橋に到着。艇が離れないように艇の金具を栈橋に寄せる。いつものように『お疲れさん!』の言葉を掛けると同時に、彼の口からは『今日でシングルは終わりですね!』という言葉が返ってきた。この言葉は、いつまでも私の心に残ってしまった。しばらくして、先ほどの言葉がよく理解できず艇を担ぎながら保管場所への移動の際にもその事が気がりになってしまった。考えるに 1 週間後の東海大会はダブルスカルでの出場も控えているし、大学受験に向け、これでボート競技を引退するとも受け止め難い。私自身、彼に対しては県代表としてシングルスカルで出場した春の全国選抜大会での印象が強く、彼がずっとシングルスカル 1 本であるという先入観がそう思わせているかも知れない。(結果は 50 位)

本日の大会も終了し、明日の組合せが掲示板で発表された。森下選手の決勝の組合せは、準決勝の着順タイムで拾われ C 組決勝のレースに進出。事実上、ここでベスト 16 入りしたことにもなった。

大会の最終日。森下選手の出場する第 3 レースは 9:32 からである。大会 5 日目となると保管場所への出し入れ、艇を持ち上げたり、担いだり、出艇・着艇場所への移動等、選手との共同作業もだいぶ慣れてきた。いつも通り、出艇させたあとに急いで艇庫に移動し、水上練習を観察する。今日も特に問題はないようである。

ゴールの位置：ラインはないが対岸の表示物との目視で判断



9 時 32 分、第 3 レースのスタート。森下選手にとってはこの大会の最終レース。世界大会代表の座は逃したもののアジア大会? がある。最後まで踏ん張って漕いでもらいたいと願う。そう思ううちに艇庫前を艇が次々と通過する。そして、スタートから 8 分後、それぞれの艇がゴールする。艇庫前でも力漕していた森下選手ではあったが、残念ながら 6 つ目のブザー (16 位) でゴールした。

いつものように着艇を見計らい、栈橋で労いの声掛けをして艇を橋に固定した。すると『私って大事なときに、いつも力が出せないんだよねえー……。』と淡々とした口調で語った。私にとっては残念な結果だと思っていたが、本人からするとさほど気になってはいなかったようで安心した。

山田選手にせよ森下選手にせよボート競技に没頭するほど、学校や普段の生活において何らかの犠牲を払ってきたのだろう。長かったこの大会の最後にそれぞれの本音? が聞けたことはよかったのではないかと思う。

そうこうしているうちに、全競技日程が終了した。続く表彰式では、A決勝に進んだ選手が国際ジュニア大会(フランス)の代表候補として、開催期間まで数多くの合宿に入るそうである。是非、頑張ってもらいたい。

私自身、この大会に参加し、選手と一緒に行動することが何か自分の存在感を感じさせてくれる。毎日の選手の食欲やメンタル面、ヘルスケア(テーピング)などの健康管理に関わると同時に、大会生活そのものが選手と接する時間を確保させてくれている。そのため、全力を尽くして競技へ取り組む選手の姿や真剣に物事をとらえる行動が毎日見られたことが、私自身ボート競技の顧問(副)になって良かったと思わせてくれている。栈橋から出艇すれば急いで石段を登り艇庫までの上り坂を移動し、その逆にゴールすれば急いで着艇栈橋に向く。この繰り返しの連続ではあったが何の苦にもならなかった気がする。かえって、私にとっては年齢に適した良い運動であったのだろう。むしろ感謝しなくてはいけない大会でもあった。